



岡崎市美博ニュース  
【アルカディア】

codjo

O K A Z A K I  
C I T Y M U S E U M S  
N E W S

VOL.35



エッセイ

「聖地」直島 — 受難の一日

決然たる人 — 写真家 中平卓馬

現代のコンフィギュレーション

備前曲輪の中根家侍屋敷

三河真宗のはじまりと真仏・顕智上人

岡崎乾二郎  
2007年

OKAZAKI  
MINDSCAPE  
MUSEUM

岡崎市美術博物館

# 「聖地」直島 — 受難の一日

館長 芳賀 徹

瀬戸内海に浮かぶ周囲17kmほどの小さな美しい島、直島なおしま — ここは1990年の初めから、ベネッセコーポレーション（社長福武総一郎氏）が新しい文化村・藝術の島として開発してきたことで広く知られている。ことに2004年7月、島内の山中に安藤忠雄設計による地中美術館が開館してからは、現代美術の一種の聖地とさえ見なされて、国内外から美術愛好家がしきりに直島詣でをするようになった。島の南端の岬に立つ美術館併設のホテル「ベネッセハウス」などは、外国人客でほとんどいつも満杯だという。

いやしくも藝術系の仕事の一端につらなる者としては、一度は見学しなければと促されて、昨春（2007年）4月半ばの週末、大学院の男女学生5名とともに始めて、岡山県宇野の港から直島に渡った。フェリーで20分の距離である。

宮の浦の埠頭に着くと、さっそく草間彌生の赤い巨大な斑入りの南瓜が待ちかまえていて、私たちが大喜びさせる。そこからまず訪ねたのは、島の反対側の本村にある「南寺」。昔のお寺の跡地に安藤氏設計の黒い焼杉板張りの大きな平屋があり、そのなかにアメリカの作家ジェームズ・タレル（James Turrell, 1943-）の照明作品が設置されている。私たちの直島受難劇はこの巡礼の第一歩から始まった。

杉板壁にそって長い行列を作り、入場の順番を待っていたときだ。私はこの壁がほんものの板なのかを確かめるぐらいのつもりで、右手の中指を曲げて軽く壁を叩いてみた。するとその途端に、若い男の係員が飛んで来て、「叩かないで下さい。中にひびきますから!」と叫んだ。ひどく生まじめな細面の男のおとがめに、私はびっくりし、平謝りし、かつ辟易した。展示関係者の一種異様な神がかり的な雰囲気感を早くも感じとらずにはいられなかったからである。

この小アクシデントのおかげで、建物内部の真暗闇のなかに入って、待つこと数分、一番奥の壁にタレルの青い四角い光がぼおっとあらわれ始めたときも、少なくとも私には「なあんだ、もったいぶりがあって」との思いのほうが強かった。

本村に点在する「家プロジェクト」では、宮島達男による民家屋内の水中ダイオードの発光装置は、まわりの木の柱や梁や障子が湿気で傷まないかと心配だったが、とにかく美しかった。杉本博司が全面的に新改築した護王神社とその地下の石室は、まわりの木立の隙からの海の眺めも美しく、気に入った。八幡様の本殿の床におかれた上原三千代の乾漆の猫2匹は、なかなかの存在感で、私たちは代る代るにその背を愛撫した。



受難が再開したのは、午後遅く地中美術館に入ってからだった。安藤氏の全コンクリートの館の長い細い通路や、斜めの壁や階段や三角庭園は、一貫して迷路を形成し、ここに完全な別世界を宿すこととなって、確かに面白い。ところがモネ



の睡蓮の部屋に入ると、三方の白い大きな壁に一点づつ作品が嵌めこまれている。ガラスケースごと壁面にぴったり水平に埋め込まれた油彩画面は、睡蓮を浮かべ空や雲や樹影を映す池水のあの不思議な奥ゆきを、半ば失ってしまっているように思われた。学生たちとそのことを批判しながらも、なおこのモネの浄土を（もちろん小声で）礼讃していると、そこにまたもつかかと寄って来たのが、こんどは女性の制服姿の監視員。私たちは恐縮していっせいに口を閉じた。そのとき婦人客が一人、私たちを睨めつけながら部屋を出てゆくのを脇目に見た。

さらに恐しかったのは、同館内のウォルター・デ・マリア（Walter de Maria, 1935-）の『タイム/タイムレス/ノータイム』と題された作品群の一室。上昇するコンクリート大階段の中段に、黒花崗岩の大きな円球がおかれ、四方の壁面には三・四・五角の金箔の小柱が30本近くも、なんらかの幾何学的法則に従って三本づつ高く低く整然と据えつけられている。この室に足を踏み入れた途端、私はこれは18世紀ヨーロッパの理神論者たちの神殿そのものだと感じ、直島の全展示にみなざる半ば宗教的な独善と威圧の感がついにここに極まったと覚った。そうすると敢えて冒流的行為をしたくなるのが私たち俗人である。黒御影の球面に自分たちのおどけ姿を映してみたり、金箔の御柱にわざとすれすれに指を差し出してみたりした。そのたびに制服姿の男性係員が「さわらないで下さい」と言いつつ威嚇してきたのは、もちろんのことだった。

だが、この「聖地」にはさらに奥の院があった。それは同じ館内にあるタレルの「オープン・スカイ」と題された一室。題名どおり天井のコンクリートが5~6m四方の正方形に切り抜かれて、外の空や雲がそのまま見える有名な仕掛けである。館を出たり入ったり、ひどく大げさな手続きを経て、夕刻約40人の観客とともにようやくその室内の石のベンチに座ると、なるほど見上げる黄昏の空は実に美しい。やがて正方形の空が真黒になるころ、小雨が降りだした。係員は膝掛けの毛布を全員に配ってくれたが、そのとき私たちのグループが少々ざわついたのがいけなかった。たちまち四方から「シッ!」の声。学生の一人はさらに隣の信者に小突かれた上に叱責された。

この究極において私たちはついに納得した。この直島はまさに現代美術という新宗教の「聖地」なのだ、と。そして地中美術館は、その聖地巡礼の中核となる「サティアン」にほかならないのだと。あな、かしこくも、おそろしや。

# 決然たる人 — 写真家 中平卓馬

学芸員 千葉 真智子

昨年12月、中京大学ギャラリーC・スクエアで開かれた「沖縄0年」展に際し、ドキュメンタリー映画「カメラになった男/写真家 中平卓馬」が上映されました。中平卓馬は、70歳になる現在も写真を撮りつづける写真家で、「カメラになった男」と同じ2003年に、ホンマタカシによる映画作品「きわめてよいふうけい」にも撮影され、また横浜美術館で大々的な展覧会が開催されたほか、昨年、批評集成の出版や過去の著書が再版されるなど、再評価の著しい人物です。

中平は、1963年から総合雑誌『現代の眼』の編集者として、寺山修司ら当時の先鋭的な作家たちと仕事を共にしましたが、写真家東松照明との出会いをきっかけに、60年代半ばから自らカメラを手にし、また映画や写真に関する刺激的な論評を展開しました。彼が、1968年に批評家多木浩二らと共に創刊し、わずか3号（十総括集）で終刊となった写真同人誌『プロヴォーク』（“挑発する”の意）は、政治的な色合いも強く、伝説的な存在となっています。この時期の中平の写真は、「アレ・ブレ・ボケ」と揶揄されることもありましたが、被写体が見分けられないほどざらついたテクスチャーと、そこに秘められたある種の暴力性は、確かにそれまでの写真概念を覆すような、「挑発的な」ものだったと想像されます。

ところが中平は、先ごろ再版された著作『なぜ、植物図鑑か』を1973年に発表すると、それまでの自身の写真を「詩的」で「ロマンティック」なものとして否定し、実際にネガフィルムとプリントの大半を焼却してしまいます。「詩（ポエジー）」は、自身がア prioriに抱いている世界像を投影したに過ぎない「イメージ」と同義であり、近代以降の芸術を保証してきた忌避すべきものと考え、世界の現れそのものを捉えるために、「詩」を排除した「図鑑」のような写真を撮ると決意したのです。世界に対するあまりにも誠実で潔癖な態度。しかし、こうした模索の果てに



「カメラになった男/写真家 中平卓馬」小原真史監督 2003年



『なぜ、植物図鑑か』中平卓馬著 初版1973年/ちくま学芸文庫 2007年

1977年、中平は重度のアルコール摂取により昏睡状態に陥ると、記憶の一部を喪失してしまいます。

その後、中平は、周囲の助けや沖縄滞在を通して少しずつ活動を再開し、現在に至るのですが、小原真史による「カメラになった男」は、その中平の日常とそれ自体が日常と言い換えられる写真撮影の様子を3年にわたって追いつけた作品です。“カメラになった”というタイトル通り、そこには、なんのてらいもなく実直に世界を切りとろうとする中平の姿があります。ただ、この映画から感じられるのは、その純粋さや無垢な態度を、単純に記憶の喪失によって開かれた新たな境地と見なすことはできないということです。それは、1973年の『なぜ、植物図鑑か』で既に明らかにしていた世界に対する中平の決然たる態度の延長線上にあるものと言えます。映画の中で、「東松照明 沖縄曼荼羅」展のシンポジウム「写真の記憶、写真の創造」に出席した中平は、写真は「ドキュメント」であり、メモリー（記憶）やクリエーション（創造）ではないとして、作家重視・作家偏重のシンポジウムタイトルを批判し、沖縄を自己の創造の手段として穏当に扱い、沖縄の現実を見ようとしないう東松照明やアラキーこと荒木経惟に食って掛かっています。というのも中平には、1971年11月の沖縄返還協定批准に反対するゼネストで警官が死に、読売新聞に載った写真を証拠に冤罪となった松永優を積極的に擁護し、沖縄という問題に深く関わってきた過去があるからです。ほかのパネリストが苦笑いをして、そそくさと会場を後にするなか、話を続けようとする中平の態度には、強く胸を打つものがあります。

長く絶版となっていた『なぜ、植物図鑑か』は、この度ちくま学芸文庫から再版され、読むことができます。また、今後「カメラになった男」や「きわめてよいふうけい」が再上映される機会もあるかと思います。是非、濃密な中平卓馬という人に触れただけだかと思えます。



会期 平成20年2月16日(土)～4月13日(日)

# 現代のコンフィギュレーション 色さまざま形いろいろ

学芸員 千葉 真智子

当館では、1年を通して様々な企画展覧会を実施していますが、その一方で作品や資料の収集を継続的に行っています。この活動は、私たちの感情や好奇心に刺激を与え、また私たちが歴史を認識する上での手助けとなる作品や資料を広く公開し、さらに時代を越えて、後世の人々の歴史記述に寄与するために保存するという美術博物館の重要な仕事の一つであり、こうして形成されたコレクションは、当館の活動を性格づけていくものでもあります。そこで「マインドスケープ・ミュージアム（心を語る美

術館）」との愛称をもつ当館では、特に20世紀前半にフランスを中心に世界的に展開したシュルレアリスム（無意識の世界に着目し、抑圧された意識の向こうに真の現実を見出そうとした運動）の作品収集を行うとともに、「現代の日本画—その冒険者たち」展以来、“今ここ”に生きる私たちの思考や感情の現われとも言える現代作家の作品収集に努めてきました。本年度最後の展覧会では、こうしたコレクションの中から「現代のコンフィギュレーション 色さまざま形いろいろ」と題して、当館が近年新

## 【美術館】 八島正明《階段》

頭部のない人間が駅の階段を上っていく後姿を描いた八島正明の《階段》。1936年生まれの八島は、シュルレアリスム系の団体である美術文化協会を主に作品の発表を行ってきました。その作品を一言で言うなら、黒と白だけで構成された色のない世界の広がりです。白い絵具を下塗りし、黒を重ねてから木綿針でひっかくことでイメージを浮かび上がらせているのですが、この油彩と言うよりは版画に近いような技法は、同じ三重県出身で、八島が美術文化協会に参加するきっかけを作った浅野弥衛との関わりを感じさせます。また作家によれば、モノクロームの画面に影のような実体のない人物像を描き出すというスタイルは、1950年代後半に友人から見せられたある写真に由来していると

言います。広島原爆の閃光によってビルの階段に焼き付けられた人影を写した有名な写真です。このかつて在ったものの痕跡であり、消失・非在の証拠でもある影には、さらに八島が生まれ育った太陽の光の十分に届かない暗く厳しい山村の環境と、栄養失調によって幼くして亡くなった妹の“不在”のイメージも重ね合わされていると言います。

本作では新に都会の光景が主題となっていますが、ここに登場する顔のない人々の群れは、大衆社会において「個」を喪失した寄り辺ない人間存在を表象するものであり、八島につきまとう“不在”のイメージが、新たな展開を見せていることが認められるでしょう。



八島正明《階段》1984年

に収蔵した現代美術の作品をご紹介します。「コンフィギュレーション」とは、翻訳すれば、相対的配置・構成・地勢。つまり、現代美術の多様な表現とその中でそれぞれが占める位置を暗示しています。展覧会では、多彩な美術作品が、様々な色や形を介して交錯しながら、それぞれの場所を獲得している様をご覧いただけることでしょう。また加えて今回は、明大寺町にある岡崎市美術館が収蔵する東海地方出身の現存作家による作品も展示します。美術館は、「地域ゆかりの作家」をキーコンセプトにコレクションを行ってきましたが、いわゆる「現代美術」と称されるフィールドで活動する多くの作家が無所属

であるのに対して、美術館でコレクションを進めてきた作家の多くは、近代以降に形成された主要な画壇や美術グループに属しながら—例えば、荻太郎さんは、新制作協会に、八島正明さんは美術文化協会に（2002年退会）、また佐々木豊さんは、国画会に属しています—、もう一つの現代の美術状況を描き出しています。いわばこちらも現代のコンフィギュレーションを形作る一要素と言えるでしょう。

そこで、こうした趣旨に基づいて展示される作品の中から、美術博物館、美術館所蔵作品をそれぞれ一点ずつ取り上げて、その魅力をご紹介しますと思います。

## 【美術博物館】 小川信治《風景連続体1-4》

小川信治による本作は、4点で一つの組み作品となっています。いずれも古い写真絵はがきを見ているような気にさせられる精巧な画面ですが、実は、これらは全て鉛筆で緻密に描き出されたものです。驚きと共に、その根気のいる作業に思わず感心してしまうところですが、では、このように手の込んだ描写によって、作家は何を意図しているのでしょうか。

そこで4点を注意深く順番に見ていきましょう。すると“連続体”というタイトルが示すように、1の場面に登場するモチーフが2の場面に、2の場面に登場するモチーフが3の場面に、3の場面に登場するモチーフが4の場面にそれぞれ入り込み、連続的に展開していることに気づくはずです。小川は、古い絵はがきに登場する様々なモチーフを組み合わせて一枚の絵を描き出し、さらにそのなかの一部分を、別の絵はがきから選び出し

たモチーフと組み合わせることによって、次の絵を描き出すという作業を繰り返しているのです。あたかも実写のように見えるこの風景が、どこにも存在しない非在の場所であること。そして、その非在の風景が、差異を持ちながら、無限反復するという可能性を提示していること。それは、「オリジナリティーとは何か?」「作品が一つしか存在しないということが、芸術の価値を高めるのか?」といった芸術にまつわる根深い問題提起であると同時に、二次元媒体におけるバーチャルな世界（CGを駆使した映像やインターネット上に氾濫する多様なイメージなど）が深化し、確固としたイメージが不在となった今日において、私たちの世界に対する手ごたえが如何に曖昧なものになっているかを改めて認識させるものと言えるでしょう。



小川信治《風景連続体1》2002年



小川信治《風景連続体3》2003-2004年



小川信治《風景連続体2》2003年



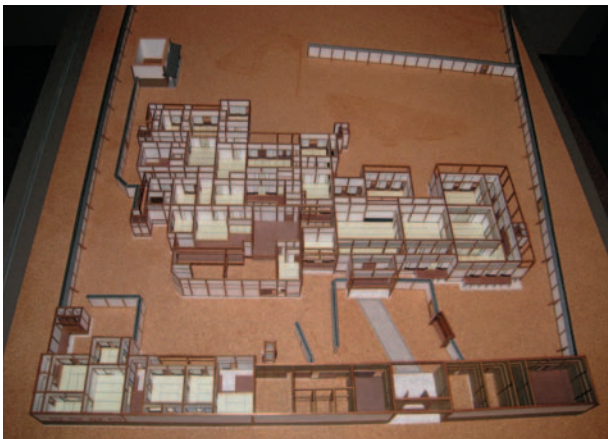
小川信治《風景連続体4》2004年



# 備前曲輪の中根家侍屋敷

学芸員 堀江 登志実

現在開催中の『中根家文書』刊行記念展「隼人がゆくー藩政改革にかけた岡崎藩士の世界」には、備前曲輪にあった中根家侍屋敷の図面とそれを立体化した模型が展示されています。模型は図面をもとに愛知産業大学小川英明教授の研究室に制作を依頼して出来上がったものです。50分の1の縮尺模型で、大きさは135cm×175cmほどになります。江戸時代の上級武士の住まい、間取りなどの様子がビジュアルに表現されています。模型制作の原図となったのが、指図と呼ばれる屋敷の間取を記した図面です。平面図である指図だけで建物の立体構造を推測することには無理がありますが、ここでは侍屋敷の他例を参考にしながら立体模型を制作していただきました。



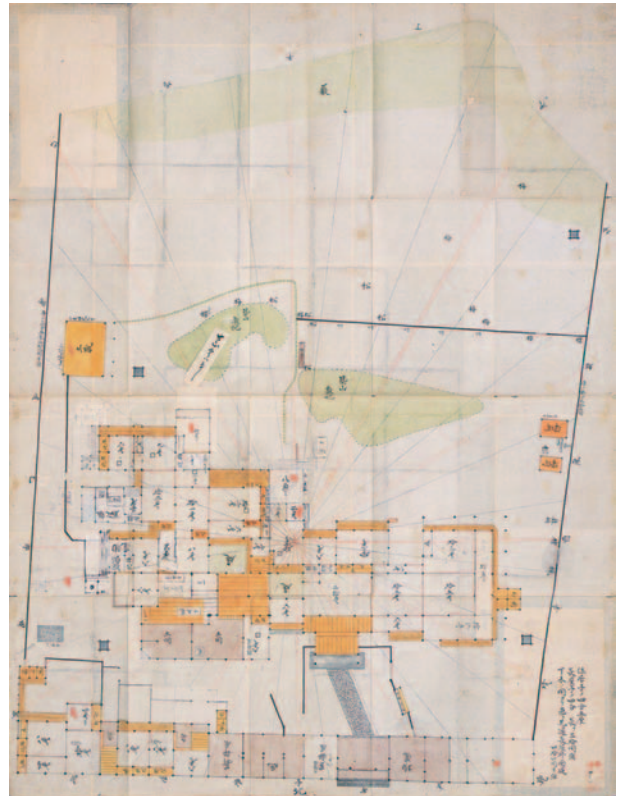
中根家侍屋敷の立体模型

この模型制作に使われた指図ですが、中根家には備前曲輪屋敷の指図が4枚伝来しています。模型制作の参考にしたのはそのうちの一枚ですが、これらの指図には間取のほかにも様々な情報が盛り込まれています。ここでは指図から読み取れることを記し、屋敷模型鑑賞の参考としましょう。

備前曲輪の中根家屋敷は現在の岡崎市康生通西2丁目あたりに位置していました。岡崎城内の侍屋敷のなかでも最大の広さをもつ屋敷です。屋敷地の形は指図の通りで、広さは図面に記されたところでは、西の南北が35間5尺（約64m）、北の東西30間6寸（54m）、東の南北39間2尺5寸（約70m）、巽（南東）の角から坤（南西）の角までが32間（57m）、南の山の張り出し部分の最長南北で44間（79m）とあります。

この備前曲輪の屋敷は中根家が入るまでは、藩主の本多一族である本多兵部忠寛の屋敷でした。本多兵部は安永7年（1778）頃岡崎に来住したといい、江戸の幼い藩主本多忠典の名代として藩政に関わったとされています。屋敷の規模からも藩主の一族が住むに相応しい屋敷です。本多兵部はのちに江戸に帰りますが、その跡地の屋敷に寛政11年（1799）に三の丸屋敷から入ったのが中根隼人忠容です。

北側の通りに面した御門から入ると、石を敷き詰めた通路を



中根家備前曲輪屋敷図 中根忠之氏蔵

経て玄関へと続きますが、建物は大きくわけて西側の来客のための空間、東側の私的な空間に区分されるとみられます。西側には使者の間、書院、東側には居間、台所、湯殿が配られています。建物の奥に位置する庭園も東側では背後に仕切りが設けられています。屋敷地の一番奥は藪となっていますが、藪の前は畑と記されている図があります。畑地として利用していたのでしょう。畑地との仕切りも来客の視線をさえぎるためのものかと推測できます。

上級武士の侍屋敷には庭園を配するものがみられますが、中根家の屋敷でも築山を配しています。東側の築山はのちになくなり、西側のみとなります。来客を意識した西側の庭園の仕切り堀近くには桜の木が多く植えられています。仕切りより奥の畑地には梅の木が多く植えられています。

また、屋敷地の一角には稲荷が祀られ、武士の信仰の一端がうかがわれます。稲荷神は武家においても信仰が篤く、屋敷神としてもよく祀られています。

4枚の絵図面には相違点が一部ありますが、これは屋敷が改修されたことを示しています。侍屋敷の修復は原則としては、藩の許可を得て藩から修復金を得て行われます。中根家文書によると、中根忠容がこの屋敷を拝領した時、屋敷建物が傷んでいたようで、中根家では藩から200両を貰い修復しています。以上、中根家侍屋敷の図面について記してきましたが、現代の私たちの家屋敷と比較してみるのもおもしろいかと思います。

# 特別企画展「三河念仏の源流 —高田専修寺と初期真宗—」

## 三河真宗のはじまりと真仏・顕智上人

会期 平成20年4月26日～5月25日

学芸員 浦野 加穂子

岡崎市を中心とする西三河地域は、古来浄土真宗の盛んな地域です。市内の仏教系宗教法人307のうち、40%以上の125が浄土真宗諸派（本願寺派・大谷派・高田派・興正派）であり、近隣の安城市でも51%、西尾市では37%と真宗寺院が高い比率を示しています。三河における浄土真宗のはじまりに重要な役割を果たしたのが親鸞の高弟、真仏と顕智です。今年は真仏750年忌及び顕智700年忌にあたります。今回の展示では、親鸞及び真仏・顕智の事跡と三河真宗の源流を探るとともに、高田本山専修寺（三重県）をはじめ、東海地方の真宗寺院が育ててきた至宝の数々を一堂に会します。ここでは、三河真宗のはじまりと真仏・顕智の関わりについて紹介します。

三河真宗の起源については、『三河念仏相承日記』（上宮寺・東泉寺蔵）によると、建長8年(1256)親鸞の弟子である真仏、顕智、専信と下人の弥太郎が、関東より親鸞に面会するため上洛する途中、矢作の薬師寺で念仏勧進を行ったことに始まります。その後4人は上京して親鸞に面会しますが、しばらく親鸞の元に留まることになった顕智に対し、先に帰国する真仏が、再び三河に留まり念仏勧進を行うよう命じました。同年末に下向した顕智は、三河の権守殿（出家名円善）のもとに滞在し、3年にわたり念仏勧進を行いました。これにより円善の嫡子袈裟太郎（出家名信願房）など35人が真宗に帰依し、このうち庄司太郎は顕智を平田荘に迎えて正嘉元年(1257)に道場を建立、信願は碧海荘赤波に道場を開き、以後三河に真宗が繁昌するようになったとされています。なおこの平田道場が現在の妙源寺、赤波道場が勝鬘寺のはじまりと考えられています。

真仏は、常陸国真壁（茨城県）の武士、椎尾氏の出身とみられ、承元3年(1209)生まれで、嘉禄年中(1225～27)関東にて教化を行っていた親鸞に帰依しました。親鸞の帰京後も、下野国高田（栃木県）の如来堂（後の専修寺）を中心に精

力的に活動を続け、親鸞直弟子の筆頭にあげられるなど、関東における最大の門徒集団を作り上げ、後に関東より東海、北陸へと発展する高田門徒の基礎を築きました。正嘉2年(1258)師の親鸞より4年早く、50歳で示寂しましたが、親鸞の著書を数多く書写しており、親鸞が加筆した三帖和讃（国宝）や顕浄土真実教行証文類（教行信証／重文）などが現在も専修寺宝物館に保存されています。

顕智は、その出自などは明らかではありませんが、親鸞の直弟子であり、真仏亡き後の高田門徒の中心となりました。弘長2年(1262)親鸞入滅の際には、専信とともに葬儀を執り行い、関東の門弟を代表して京都の大谷廟堂の建立に尽力しました。その後も廟堂の守護と経営の主導的立場を担い、関東門弟のみならず初期真宗教団のリーダーとして活躍しました。延慶3年(1310)85歳で示寂しますが、専修寺（栃木県）に伝わる坐像（重文）は、胎内銘より四十九日過ぎに制作されたことが判明しており、像主の容貌を承知して制作されたリアルな肖像彫刻として、また銘のある最古の真宗僧侶肖像彫刻としても貴重なものです。

今回の展示会では、真仏・顕智の坐像（重文、栃木県・専修寺蔵）を三河で初めて公開し、それぞれの事跡をたどるとともに、三河真宗の起源について、真仏・顕智らの教化をはじめ、同時期に三河で発展した専信房専海の門流、光信房源海の門流（荒木門徒）、円善を祖とする和門門徒等の初期真宗の各門流の活動などを幅広く紹介します。またその後の蓮如（1415～99）の積極的活動により本願寺派へ傾倒していく三河真宗の動向、その動きに対して教団体制の確立に努め、一身田（三重県）に無量寿院（現在の真宗高田派本山専修寺）を建立し、専修寺中興の祖とされる真慧（1434～1512）の活動を紹介します。三河真宗の変遷をたどります。



《真仏上人坐像》重要文化財 栃木県・専修寺



《顕智上人坐像》重要文化財 栃木県・専修寺

# INFORMATION

## ■展覧会スケジュール

**2008年2月16日(土)～4月13日(日)**

### 現代のコンフィギュレーション 色さまざま形いろいろ

平成18年・19年度で購入・寄附・寄託により収集された収蔵品が当館コレクションにおいて、どんな文脈に位置付けられる作品であるかを分かりやすく紹介いたします。この機会に当館の活動を知っていただき、市民共有の財産である美術作品をご堪能下さい。

**2008年4月26日(土)～5月25日(日)**

### 三河念仏の源流 —高田専修寺と初期真宗—

三河真宗のおこりに重要な役割を果たした親鸞聖人の高弟、真仏・顕智上人の事跡と三河真宗の源流を探るとともに、高田本山専修寺をはじめ東海の真宗寺院の至宝を紹介いたします。

**2008年6月1日(日)～7月13日(日)**

### 色彩の詩人 シャガール展

シャガールは1887年に白ロシアのユダヤ人一家の長男として生まれました。彼は20世紀激動の時代、ナチスによる迫害などの悲惨な現実を見据えながらも、夢と幻想の世界を詩情豊かに描き続けました。本展では、モスクワの国立トレチャコフ美術館の特別な協力を得て、幻の大作《ユダヤ劇場壁画》をはじめとする代表作を中心に、シャガールの芸術表現の本質に迫ります。

●開館時間／午前10時～午後5時

午前10時～午後6時(6月～9月)

〈入館は閉館時間の30分前まで〉

●休館日／毎週月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始(12月28日～1月3日)

※展示替えのため臨時休館することがあります。

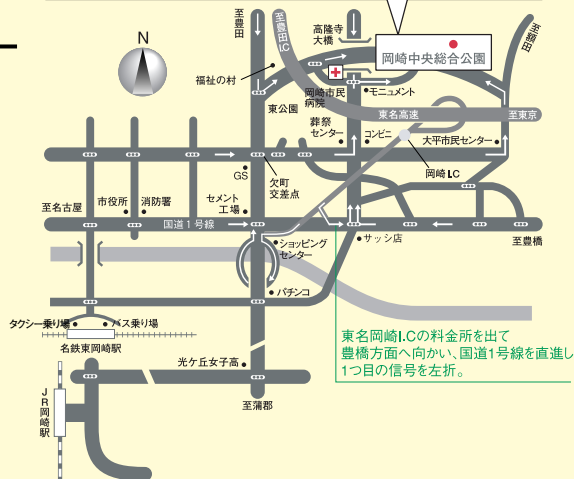
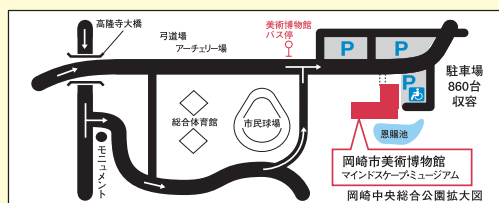
◎公共交通機関／名鉄東岡崎駅バスのりば②より25分、

(名鉄バス) 「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分

◎タクシー／名鉄東岡崎駅から約15分

JR岡崎駅東口から約20分

◎自家用車／東名高速道路・岡崎ICから約10分



# OKAZAKI CITY MUSEUM



【岡崎市美博ニュース／アルカディア】

●Arcadia 第35号 ●2008年1月発行 ●編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

**岡崎市美術博物館** 〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内  
TEL0564-28-5000(代表)

ホームページ <http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>

